

初夏の高尾山で精神修養
第百十回
信徒峰中修行会
 六月四日(土)～五日(日)



松永祐翼先生による法話、「うっかり僧侶の修行奮闘記」



気合を込めて滝行を修す



神変堂にて法楽をあげる



柴燈大護摩供が厳修される



一文字ずつ心を込めて写経をする

特別寄稿

高尾山薬王院と

薬師如来信仰・後編

八王子市 石井 義長

三、飯縄大権現

江戸時代中期の十八世紀前半に、新たな飯縄大権現堂が建立されて以降、外山徹氏によれば飯縄大権現が高尾山内において中心的な位置を占めるようになり、あまり「薬師」の名は見られなくなり、高尾山の御利益として「当病平癒」は変わらず引き継がれていると言われます。

そして、明治維新後の神仏分離令による受難の時代を、高尾山は薬師如来及び、仏の化身である「飯縄不動」を祀る「寺院」と位置付けて、乗り切ります。

しかし、明治十九年(一八八六)九月、台風による土砂崩れのために、薬王院の旧本堂(現書院地)は倒壊し、山内の中心的な堂宇であった薬師

堂も崩壊したといえます。

この災害の復旧事業の結果、明治三十四年(一九〇一)に薬師堂は山麓の大光寺本堂として移築され、その右の大日堂は大師堂として、左側の護摩堂は奥之院不動堂としてそれぞれ山内に移築され、跡地に現存の大本堂が再建されました。

俊源大徳が感得した飯縄大権現の本地仏は不動明王です。不動明王もまた、病氣平癒の御利益もある仏と受け止められています。そして、『縁起』に「威靈赫々、見る者を毛を逆立て、正視するを得ず」と述べられる飯縄大権現の像容が、江戸時代中期以降の不動明王信仰の社会的広がりと共に、飯縄大権現を高尾山薬王院の御本尊として定着させたというところでしよう。

堂も崩壊したといえます。この災害の復旧事業の結果、明治三十四年(一九〇一)に薬師堂は山麓の大光寺本堂として移築され、その右の大日堂は大師堂として、左側の護摩堂は奥之院不動堂としてそれぞれ山内に移築され、跡地に現存の大本堂が再建されました。

不動明王は、真言宗の

教主である大日如来が衆生教化のために化身した、教令輪身とされています。従って、現在は真言宗智山派に属する高尾山薬王院の御本尊が、大日如来に通じる飯縄大権現とされるのは、教義的にも理があると考えられます。

それでも、薬王院の悠遠な信仰の歴史を辿れば、開山本尊である薬師如来と、中興本尊と位置づけられる飯縄大権現が、共に合わせて信仰されるといいう形が、先覚者たちの築き守ってきた薬王院本来の姿と言えるのではないのでしょうか。

四 病苦と薬師如来信仰

人間の一生には、生・老・病・死の四苦を逃れることが出来ませんが、中でも病苦だけは、神仏にすがることによって、その平癒を望む余地があると云えましょう。

私事ながら、老生も十数年前に、がんの手術を控えて薬王院に参拝し、

大本堂内で寺僧から、「仏様の力を頂いて帰って下さい」と声を掛けられて、真実有難く感じた経験があります。

現代の医療は進歩しても、「心」の問題は最後まで個人の課題として残ります。古代からこの課題に答えようとして、日本人は山にも町にも海岸にも薬師如来を祀り、仏教美術の面でも、奈良薬師寺の金銅三尊仏をはじめ、世界に誇るべき精神性の高い、崇高な名作を数々生み出しています。

「心のふるさと 祈りのお山」として、内外の参拝者もますます増えていく高尾山にあって、深い慈悲をもって衆生の病苦をいやし、心身に安楽を与えるという薬師如来の尊像を、せめて壮麗な大本堂の一隅にでも、復活・荘厳して頂けないで、あるうかというのが、永年薬王院に参拝させて頂いている、八十三歳の老生の切願です。



「祈りのお山」として無数の人々の信仰に支えられてきた高尾山

飯縄大権現と結ばれての約六百四十年と、寺名にその名を頂く薬師如来と結ばれてからは、千二百七十二年と伝わる、悠久な歲月の中で、僧俗無数の人々の信仰に支えられてきたわけですから。

(仏教研究者) 訂正のお知らせ
 先月号十七ページ「高尾山薬王院と薬師如来信仰」の文中、三段一行に「一六一五」と訂正させていただきます。

茲に謹んでお詫び申し上げます。